琉球大学学術リポジトリ

経典補註

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション：琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内（みやらどぅんち） キーワード (En): In Collection: The Miyara-Dounchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: -, 2009/6/5 16:47 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6220

經典

補註

常四時周ノ復始ニ循環不窮乃天道ノ流行不易之當理

陽有覆ニ萬物之功剛之正直ナリ

遂乗金徳生ニ之ナリ

健ハスコヤカナリ陽ニ屬シ仁禮ヲ陽トシ健トス

循ハシタガフ九序也　環ハメグル周迴ナリ

乾 陽天君心

健 元 春 木 仁 肝 酸 父子

亨 夏 火 禮 心 苦 長幼

常 四象 四徳 流行不易

四時 五行

土 人牲 信 五臓 脾 五味 甘 五倫 朋友

利 秋 金 義 肺 辛 君臣

貞 冬 水 智 腎 鹹 夫婦

坤 母地陰 順

陰有下發生載ニ萬物之功柔順ノ

順ハシタガフ也陰ニ屬ス

利貞遂乗土徳成就ナリ

義智陰トシ順トス

欽撰

天文地理ハ学ニ伏犧ハ河圖ヨリ出て曆易水波ハ一とく常ニ變ニ差有ニ之ニ其源一也所謂曆ハ是性命ハ理ニ沿ハ國人ヲ安ヘド政ヲ勝ニ也故ニ黄帝河圖ヲ定て天文ヲ除ニ歳時節の遷移ヲ考ヘ小辰ヲ說て文字ヲ記し日ヲ印し門ヲ別て晦朔閏月ヲ測ヘ曆始て制ヲ帝嚳猶識衡ヲ立ルして七政ヲ齊ヘ曆ヲ治め民ニ教てヨリ以來世ニ之ニ重ヘし用ヲ集め事ヲ講て紀ヲ云和漢ニ成ヘリ因ヲ之ニ聖人ハ曆ハ道理ヲ妙ルて其奥旨ヲ

家して鞍事は暦ハ算術を已にて本理を辨へる故地理に於差
蓋し天文ハ地理を治るの本なり故に美國は地形里程なりと云
天地一理にして差忒（サトシ）ナ平西海に渡し時齊陽に至て明
朝は儒士に見へて天文地理を問明容白説今古通にて
一なる中に護衛を獨り理に通しそれを書きし天ハ
渾圓にして自然に陰陽五行を具ふ其氣の粗きハ
動きに注て天内に充滿し重きハ止て地と凝り氣に
抱かれて中央に居れ是形を生（ナス）の始也此理に由て形なる
物を地とし精氣を以て天とす雲ハ火ハ形なり陽精氣也

水ハ形なり陰ハ精氣也美物皆ハ其に均しき其に於て
知る屋し天地陰陽相別を重ぬ之を本一なるを云
天に日月衆星は形有り故如何ん答曰実に形なるにあらず
日ハ是燒光はとく火は精なるを故に星を月ハ是
虹形はとく水精なるを故に冷を風を流生ハ其に同し
亦同日月衆星ハ何に由て常に運轉するや曰陽は氣ハ
動きを宗とて止事を得ず精亦其に得（シタカツ）て量物を成し
同時轉して美物變化を亦同地に野山有り古物今草木有
具河海有り其故を常ん曰陰の氣ハ靜なるを至り（ツカサド）

濕を以て躰とす陽精を潰て肉に凝り経に淖して地生る
言低は濕の多く淖なることの遅速に由る是を人に対て
之は濕は則ち躰を潤す血なり古所は皮肉也今石は髄骨也
葉は毛髪なり常に陰陽は二氣を須食し其躰を
養ふ潤濕は流水し溪澤川河は経を巡て江海は
陽に入る是二便の道路なり人倫の色に於ては西間に
生る物此のことし亦曰天地一体は理は志なり其神は
何哉ぞや曰天地則ち是也陰陽を以て体を成し陰陽を以
育養し陰陽を以て魂魄を為す是自然の理なり

陰は陰は形ちなる薪とし陽は形なき火とす薪は火に附
火は薪に附西義二年に交を一ツ出て心火と成る大極是なり
陰陽為化は機を包名ケて大極と云渾然して其既判
に及二義ありを云曰象ありて形り西行ありて布
為物ありて生諸綜施事消長の道人莫測故に
乾道は男成坤道は女成二氣交感為物を化生する時則
大に合親疎の等ありて百千ありて齊(ニトシ)きことなるなり
成化元年癸未臘月中和日

田中藤兵衛謹而撰集

五倫名義

父子ニ有親ニ

父子ハ間ハ父慈ニ子孝ヲ以テ親シミ有ル

天下ニ所在（ユルアラ）人の事を云ツ小分ケテ云ヘ倫ニ云其上ニ各其教を附て
五教とも云なり其間父母子を生ずるハ天地ハ萬物を生ずる
道理より出て父子ハ倫を定むる也相其教を立て父ニハ慈ニハ
子ニハ孝ニハ兄ニハ父を以ハ母を其間ニ有ル事と云る事し然るニ父母
たるものの子を愛するとなるハ必教（戒む）事し若シ自然ハ愛ニ
溺して子を不義ニ陥いらしむるハ是禽獸の子を愛するにて
戒の愛ニ於ケル父子なる去衣食ハ喜ひ朝夕ハ勤さハ云ニ不及

教為勇を恨て父母に志に不肖横に至る事し始ぶれば識に
孝にいはゞ但其簡要を云に父子は同亂一体の去なれば
一事に毛頭も隔なく兎角に自然の親しきを不失を本意とす
事し始る故に聖人父子に間に於ては親しきの一家を不易に
法と定め給ふ所謂父子に親しきを云一句は永く父子の
掟を記す事し ○父子に間は天性より近け合たる親しきは
諫め用ひられぬとて止去る事きの道なし幾度も機嫌を
見て知らへて諫む事きなり父母に道を諫に成程其心に
逆ひ好横に己が顔色を悟ふし夢を和けて諫む事し

若し少入ざる時は其人に逆ふことなく敬を記し孝を記す
父母に不感悟んで機嫌よければ又諫る也一旦少入ざれば
捨て不諫罪を御罪に堕る横にまるは不孝第一なり禍ぶるに
ひきし諫て道を改る程に其間を孝子に道をせり孝子に心一ぱ
足を挙げ一ぱ言を出すに父母に心を不忘不義非禮の
言行あらんことを恨む行跡に非義の詔あれば二方の辱め也
はらば父母道を辱むることなれば深く是を恨めることなり詔は玉の
二ヶ所をいへり ○親に事ふる云は人の上に居るものは驕ぬ心を恨て
かゝる人を諫む事し上は君長の己に不限一度の上たるものなり

小なるといへ人の臣也小不限年若き人など一度の事に法を立てり
上においくれ人の禮義乱る事からざるなり 禍乱年 との三ツ此の
人云子なるに云除ぞ去らざるといへ親ち交闕なる遺體を保ッと
行くいなど亡刑此の三ツ此災なり 終に父母に辱を始またれ日に
大宋に遺隙を伺へて父母に口體を養ふことを精是不孝の
子なり ○天地に性とは即理也天地にあつては理と云人稟得て
生まる時は生ぜ人より貴きものなき人は萬物に中の靈にて貴也
又人の行ひの中にては孝道より貴きものなし 父は天の道を
法ぎ継て位なる故天子と云 言まして天子と云ふ天地に事るに

道も亦外無に事ふる孝道に外なるなる也孝道は至極をさいめ
法くなる時は日月星に三光も全く寒暑を平にして天道清して
怪なきも三光金とは或は日蝕月蝕流出又は雲に災なるのさいく
有るに類或は彗星客星に出る頭の変なきなり寒暑平には
四時の亂候平に調ひ寒暑に時を知く暑さ時を寒くも
大風洪水等に災ひなきなり

君臣有義 君臣に間は君臣を使ふに禮を以て臣君に事ふるに忠を以て名義なり

君臣不に道理は天の上に位し地の下に位なる道理より起なり人
上不に合なるもいへ人道も立ざる故に君臣に倫を定むるなり 其

其教を立て君に仁といひ臣に忠といふ義は仁と云ハなり人を
憐むを事なるといふも一通りの義然而已を心得ゆるに其私なくて
善く下を利益するを云なり又臣の恩と云も自然勤苦するを云
云に於ては其義を以て君に仕て都而事云に表裏なきを云なり
但其間要を云に君臣ハ一事に義を有言とも無し義ハ道理の
出尺を云なり君を此曲尺を以て臣を使ゆるし上に威勢に任せて
此ゆるを敗る事なり臣も此如称を以て君に事るべし已を遊ぶに
よりて此ゆるを相事なり然る故に聖人君臣の間に於て義の一字
不易の法と定め給ふ所謂君臣に義あると云一句ハ和の君臣の

控する事し○臣の君を忠勢なる云ハ二道を守て君に事り
諂ひて君の不義に従ハず君に不義ありて其ハ三諫を云と
説金ハ○ハ逃り去て事なることを止るなり又忠勢とハ己が志を
尽して勢譲なるをいへり臣ハ君の命令を成事しきたる也
然るを君の無理なることを申かけ志のぞ恒れなる事なり上位に
居て躰に驕り時勇を亡し家国天下をも亡ぼ事なるなり
人君ハ天地鬼神等物の主なり孝道を以て三極を弱しぬるハ
大なれハ天道の如く順にて山ハ川ハ流るゝことなく寧く鬼
神を其位を得て安んぞ是天地位なるなり微にて為獣無聲
また

悉ク其儒に志ゝ之ひ其化を交て各其性に遊る也美物育まる
なり各其所に能得活りて地道安寧なるなり

夫婦有別

夫婦の間は各定偶なりて不乱

天に陰陽あるに人に夫婦あり陰陽和合して美物を生育す
夫婦和合して子孫を生育す天人一理と云ふべし然るに陰陽は
偶に在て陽は先ぎちて陰を偶ひ陰は後ほして陽に從ふ也夫
自然の理也二理にすりて夫婦の倫を定むるなりされば夫は剛
正にて強く正しき儒を常に婦を偶ひ彼ゝに容ゝ不遜
にしてしたゝ婦は貞靜にて一筋に靜なる儒を常に夫に從ひ
聊か寵光に誇事なる事なり但其管要をいへば夫婦は和き
睦し但に男女の差別なるを本言とす事 男は外を活め
女は内を活め男は内を面の遊ひを不好女は表面の事をいへば
其内外の差別乱りなるを好とす然る故に聖人夫婦の間に於ては
別の一字を不易の法と定め給ふ所謂夫婦に別あると云一向は
永く夫婦の接なる事し ○有別は配偶と云ふ配は對也合也
正也偶並也合也對也夫婦の其れ人に定りて乱れ故を別と云
有別とは夫婦の間は親しき易し故に常に志ゝ也此に依ふるを
別と云又夫ゝる云は和して義有各有命別是を別といふなり

長幼有序

長幼の間能く兄弟の次第有りて乱れざる

父母の中より先に生れたるを長とし後に生るるを幼とす兄弟と云ふも同事なるべし如何となれば兄弟は同じく父母の生体をうけて大切なるものなれば是によりて長幼の倫を立てて兄は弟を愛し弟は兄を敬ふを道とせり然に父母死して後は父母の形見とも見るべきは兄弟なり常に形影の離れざることく兄は弟を愛し弟は兄を敬ひて亦不諍隣小事大事にも但し兄弟は天倫として同気にて生まれ天乃定まる次第なるを以て假令兄弟は乱しても長幼の次第を肉体の兄を忘れて家督を継ぐは後継

少しの事にても兄に先立つ事有るべからず次第ありて一家の倫乱れざるなり然るに聖人兄弟の字に於ては序と云ふ字を用ひ給ふ序は次序にて次第の事を云ふ長幼に序ありと云ふ一句は家の長幼の程なる序にて○長幼は父母に事ふる道を推して君臣の次第を天地に事ふる道を推して長幼尊卑の道とし一つ序に順ふことを云ふにして人の道行はれ来ることを肝要なり

朋友有信

朋友の間誠信ありて偽らず

天地の間に天地の気を受けて生まれたる朋友として道理を知りて朋友の倫を立てて仁を補け善を責め朋友の道を立てよ

仁は己が行ひに私なき事なり仁を輔るとは己が情欲に害ある
朋友の相輔けによりて仁に至るを云義を責るといふものを從従
すること一事に善を行ひ悪を責て云所は善なる人は文といふもの
學する人に交るをは益友とし柔弱にて佞る人は諂ふ諛
なる人に交るを損友とし規きは益友を求め損友を遠け職んし
諫義をしく懇勤にて恭敬なし但其當要をは明友に講じに
物をなひ思とし事を損ことなくすゝめれは百一貞信にて相親ざるを
其言ふべし故欲に望人朋友の間に於て信の一字を最尚し
法と定の書に所謂朋友に信ありと云一句は此朋友の信なる者也

○友の其友を忠告すと云は君子は仁を輔るに以て義を以て
道びく時は其心の職を盡して告て諫めて義を以て道びく也忠は
まごゝろなりまめやかを盡す心の職を盡さず乱を和げ懇に
義理を以て諫むも其を聞ざる時は其咎めして止む也其を詫く
諫る時は却て中悪くなり辱しめを受くるなり ○博愛衆に及し
人に深切を盡すべし争ふ時は関わしくなり其人の争闘を招くなり
其上は軍器刀を取り争に劇しかり死亡するを云 ○[illegible]同[illegible]の
友に交るに和順の心を持一にて争ふことなき所をいふなり
○[illegible]象 元は乾の徳にて天を統なり 乾は徳元亨利貞の四つあり元は則人の首なる時は生理動則
事處比[illegible]なりて胸膈 貞は則元気比[illegible]る所なり

元

生物之始一本を成て以ハ花の淵がんていまぐ開ゆるなり
四時に於ては雲なり人の性に於ては仁なり是衆美の長なり

亨

生物之通一本を成て以ハ花開盛なり四時に於ては夏なり
人の性に於ては禮なり是衆美の會なり

利

生物之遂一本を成て以ハ花成て五結なり四時に於ては秋なり
人の性に於ては義なり是其分の和を得るなり

貞

生物之成一本を成て以ハ実成熟なり四時に於ては冬なり
人の性に於ては智なり是衆事の幹（モト）（タイ）となるなり

四時

春 元東小屬 風四二三月

夏 亨南小屬 風四五六月

秋 利西小屬 風七八九月

冬 貞北小屬 風十十一十二月

五事

一曰貌得水也既生則聲音發て為言故

二曰言既揚火也言て能く視る故

三曰視散木也既に視て後聽く故

四曰聽收金也思去原ヲ心通于四去故

五曰思猶去之四時に舞旺する也

貌曰恭貌既有之恭齊莊中正有貌即有恭之德

言曰從言有多之從順理成章有言即有從之德

視之德云明未施て神有所思

聽之德云聽物未成て虛去所聞

思之德云睿化恭從明聽之理皆有通

此五事之序也然に有物必有則故
其成敗此五事之德之有德必有用

○木を仁と云ハ則電ハ理也
○火を禮と云ハ則敬ハ理也
○土を信と云ハ則實有ハ理也
○金を義と云ハ則宜ハ理也
○水を智と云ハ則別ハ理也

五行

○一ツ小ハ木と云其形實
○二小ハ火と云其體形著
○三小ハ土と云其質最
○四小ハ金と云其體固
○五小ハ水と云其體最微

五常

○仁ハ電之理なり
○義ハ宜之理なり
○禮ハ敬之理なり
○智ハ別之理なり
○信ハ實有之理也

○水火ハ氣有て壽を生なし
○草木ハ生有て壽を和なし
○金獸ハ和有て壽を義なし
○人ハ氣なり生あり智なる故也
天下ハ黄しとは

五常要義

○人性調

言ハ仁義禮智ハ四ツ此ハ人性と云ハ人生京師ハ天理なり
其義若不迷と云ハ四ツ此ハ義を見て一ツとしての心を云ハ
故小調と云たる人ハ調の調なるゝ事と信を云ハ信ハ四ツ此
ものにあらず云ハ云ハ五行ハ土の四行小寄旺なると同し

仁

溫和慈電則電之理なり其義為測隱
慈 ゐくしむ 外にあらはるゝを云
電 いとおしむ 心にあるを云

天小元亨利貞とて四季にあぐるて四ツ德の中德とハ
天に具なる道理を云其道理人小具ハ是ハ仁義禮智と
なる其内仁ハ天小有ていハ壹小當て元と名ばく陽氣ハ
發生なる道理なり發生とハ物をあぐるて生し出を云其
道理を人に受て仁となる故小溫和慈電とて壹ハ氣の
溫和なるゝことくなして人を痛ミ憐もあるハ人とて本仁なれハ

其心情なく義を不知さるから木石にひとし理をいふ仁は
心の潤にして人をめぐミ物を傷ず常に道理に感じていふ
恩愛するゝ心なるを仁と云也し ○温は和也柔也物やわらか
なるを温和と云うつくしミめぐむを慈愛と云其は不遠
惻隱を心仁を端也是惻隱を人非人也惻は隱をいきむと
よむ惻は傷の功なり隱は痛の深也心に生ゝ如しむなり
天地は性とは即理也天地にあつては理と云人稟得て生ずる
時は生ず美物とも小正理をうけて生ずるとも人其氣は正を
得て生ず人より貴きものなき人は美物は中の雲にして

貴なり又人の行ひの中にては孝道より大なる貴きものはなし
又人具足する所の心は全德合ゝて又は仁義禮智是ぞ云
仁の一ツに皆ゝ有るなり仁は愛を至ゝ并愛は親にそしむ是
孝道は第一美物をあはれむ所也又天地は生成する氣は
形をなし理は心となる也賦ほとは人の行は考へるをうき得て
中間生ずる也天地は功は人にはらざれは成就せざる也小參ら
とは天地と並びて其化育をなすと故に天人地は三ツと云ふ
隕は圓きは象天足の方は象地也天に日時の行九解二音
六十六日はり天に風雨雲晨はり人を示取共善怒はる故

陰為雲師を為氣所為風情為雨暉為雷以て
天地与相参る也　仁ハ躰惻隠ハ用なり

義　断制裁剋則宜之理なり其義為羞悪

夫に立てハ秋に当て利と名ぐく陰氣ハ肅敬する道理
肅敬とハ草木の葉を落し実を結ひて葉物をかゝし定する
事也其道理を人ニ定て義とする故に裁制断剋ハ夜
陵なとを裁こゝる様に道理を宜くこゝ事わるへ心あり雲ハ刀に
及ひ出れあるごとく義ハ心のこれを一毛も定まりこゝものハ定ず
一云も云同しこゝ事ハ大ガ生産ニ時ハ生死生ニ時ハ死し故る

物変所して少も其筋を違ひざるを義と云産し○断ハ
裁也又変也制ハ御也裁ハ勇也又裁度也剋ハ断也裁也
口字ハ本銷衣を多くこゝ事をへを云変ハ事理ハ宜に
限てそれに乗て事を可しさゝくを云なり義ハ心を制事を
宜也羞悪を心ハ義を端也是なんハ非人也我方に不若の
事の有を恥しと思ハ羞也人の不若を見て是を小しむハ
悪なり　義ハ体羞悪ハ用なり

禮　恭敬揖御則敬ハ理也其義為恭遜　恭ハ うやうしき　形に行ふ事を云
敬ハ うやまふ　心に行ふを云

天に立てハ發に行ふ事を名ぐく陽氣ハ長養する

道理なり長い氣とは美物を長しそぎてあざやかに感ずる
事なり二を道理を人と定て禮とする故に恭敬辭讓そ
敬ひ恭と物を辭退し讓るにあり其著れ(アラハ)する所をいふ
衣冠正しく威儀乱らざるを其下を慢らず人を先ぎて
己を後にし其外勇に行ふ所何事にも依て種々に而て
おもひ自由なる爰若諭する振舞なく又は跡略にして後忘
なる事なきを禮と云也○恭敬は二ツ也らやまふなり樣は
趨也節は法度也樣は裁抑なり三重たらおさへて遊
ばりにまるを云言は禮は物をうやまひうやまふて抑て法度を

成道無根にまるなり辭讓を心禮を端也是なんは非人也
辭は辭便去己と云たとへは今親勇に功の有を人あむる時
我功に非ずとるは辭便去己なり讓は推て以て人に與ふ也
右の功をたとへ其人の功なりと云て人に與へり與ふ讓なり
禮は躰辭讓は用なり

智

分別是非則別之理なり其義為是非

天に立ては冬に當て貞と名はく陽に氣は閑茲なる道理なり
閑茲とは東方に根に如へり出けるを穴ちの也し故に美物を
閑おさむる事なり其道理を人と定て智とする故に是非を

分別するに於ては人に是非の大略（アラマシ）は知ることを其心淺く落度
氣ならずなるに依て其見付る事を宜る事なしされ各は氣の
地下に深く溺まりて其は氣ざしを行ことく常に靜なる用に
根に入て物を管攝するにあるは物に向ふ時に其のかゝる是非
逆ならずを智と云ふ也し○分別はなりて是非を分別して
是をは是とし非をは非とするを云是非を人智と云也
是非なくんは非人也若を知ては若とし惡を知ては
惡とす智は体是非の心は用なり

信　中央則実有之理なり其義為忠信

正に立ては云旺に當て定まる質なし云旺は世俗に云
云用は事なりされは四季とも云用あるごとく仁義禮智
なるは信に離るゝ但仁義禮智は外に信は道理をなるに
あらず其仁義禮智故に其実なる道理と云事を志みして
信と名づく譬は水は冷（ヒヤ）に火の暖（アツキ）に偽なきごとく君に
事へ父母に事ふるより其外労に行ひ人に交るに至るまで
其心其実にして用に私を不挟外に師を事とせず偽に
道理の一筋を守て始終変せざるを信と云ふ也し○実其
心を行ふ実は吾一念は物の道を究しみて其極致を

取て充ちる時は逃れて、其德神明に通達し顯れて
其德四海を光し輝し萬事に不通と云ことなし。○人間に
なりては父子親愛は道なり外に出ては君臣忠義は道也
是五倫の内父子君臣は道に列て行なきに大道は理なり
忠臣は君に事ふる云理を正しく是非を分明に極め云て
隱ることなく君若惡に進ひ玉ふ如狂に成ることなり君は行ひ
玉ふ道に關け失所あるは臣にて言遣を補ひ塞ひて全し
全ては復諫を云ふことを思ふなり君若心の所なる時は臣は
其君を先順ひて諫助けまして感戴せしむるなり其君

大なる所に及ばざんことを思ふなり君をして惡意は道に出るを
匡しまくひすくいさめて惡を止むるなり其外に形はれんことを
思ふことなり。○君を道なる時は臣諫むることも周ひ都て
言語を諫せらるを國亡ふに至る諫に伏と云へども諫む是忠
義なり。○天人の道昭也とは父母に孝を尊て天地明孝なると云
天道自ら明なり萬事感應に於ては云ふなり
倡ふ感と云應は彼ち拒來を云是微妙にして愛の魂なり
響は響き形に影なることとし神明彰を鬼神著を
神明通し四海を光を以て萬事みな感應は理の所を示なり

主宰天地に奉ずること明まなる時は鬼神に感じて行ふ道
和ふことあり彰（アラハル）とて神明は造化の功用あれば敬ひ祭ふ道
是る所きにあらず其福祐を降して四時妖変なく祭ふ
べしり○神明と云は造化の功用を指て云へり造化とは天地の
陰陽なる事を云へり功用は是發見なる事に注して云へ宮来昊祖
自往月来り喜生し發長なるの類なり○天地に奉ずること
上の如くなる時は神明洋々として其頃に在り如く其夜の左右
在り如くなるざんや戚祖在り如くなるべきとあり洋々と流動
の陽の見とあり水の流みちなる意なり○人分陰陽の

二氣陽を云鬼と云ひ陰を魄と云ひ死時は陰陽離散して
魄は地に帰る其子孫職をおこし敬を注ぐして奉祀をれば
其魄鬼来り格りて其祀をうくる理なり○鬼神と陰
陽二氣屈伸往来するものを指て云神は陽の雲氣の
伸る事なり鬼は陰の雲氣屈なる事なり人死する時は其
魂氣を鬼氣を鬼と云へり○天は陽也或健なる不信を
父の道なり志りを地は陰なり或順なる不信を母なり志りを
天地と云ひて乾坤と云は天地は形體なり乾坤は其性情
なり乾は健なりて息の理なり物資て以始る事の志なり坤は

順なし常なるの理萬物濟てんに生まる所の者なり是乃
天地は天地なる也人なりて志かれ萬物に父母なる者なり人
氣を天に稟形を地に賦し藐然の分混合て間なくして
中に位を子の道なり乾は陽坤は陰に當て天地は氣西間に
塞(ミツテ)て人物は資てんに體となる所は者なり故に天地は塞は吾が
體なりと乾は健坤は順是天地は性なり為氣沖人物は
資てんに性となる所は者なり故に天地は沖其性と云深く
當を考はれば則乾は父坤は母混然と中處なるは實
見ゆ事し人物天地は間に並生し其資てんに體となるもの

皆天地は沖なり全體に偏高生正は殊なるなり故に其性に
於てなり明暗は愛り惟人也其形氣は正を資て是んに其心
を盡にてんに性命は全體に通ずることなり並生は中に於て
同類を黄しとするものなり故に同胞と云は則其當を見ることなり
亦也兄弟の如く惟當を同胞の人故に天下を一家とし中國を
一人とし間なく然なり物とは則其の形氣は偏を資て性命は
正しきに通ずることなくいまだ故に我と類を同ふ也にて志かれ
人の黄に志かれ其體性はなる所をたづぬるに是亦當を
天地に なげけて、まゝ當てこの同也故に吾則其當を視(ナヅラフ)なり

亦已ゝ儕輩ハ一ヒ者ハ乃天地ハ間ニ形ヲ有ルモノ若ハ
動キ若ハ植(タテ)情有ル性有ルヲ以テ其性ニ沿ヒ其宜ニ
遊ることヲ有ル事ヲ云ヘシ此儒云ハ道ヲ以テ天地に
まじはるニ知ル也人ニ化育をたすくるニ知る後ニ功周ハ
念ヒ也ヲ以テ志ヲ外ニ治ル事ニ有ルニ有ルヲ也ヘ此ヲ
乾ハ父坤ハ母ヲ以テ志ヲ人其中ニ生ルハ則乃天下
ハ人ハ皆天地ハ子ヲ以テ志ヲ天地に継承ケ人物を
統ヒハ則大君のこと

○東　元春　東ニ屬して青龍ニ為ハ青　將軍ハ官孫ニ出ヲ
人其氣ヲ得生ルハ形貌夜長至仁雷氣又工作ニ有リ

○火　亨夏　南ニ屬して朱雀ニ為ハ紅　君至ハ官神明ニ出ヲ
人其氣ヲ得生ルハ西上尖下闊ニ至聰明ニ以テ文章ハ士又画工ニ有リ

五行○云　日本白障騰蛇ニ為ハ黄中央屬て則沖和て徳順ニ為ヲ倉廩ハ官孫ニ出ヲ
人其氣ヲ得て生ルハ形貌敦厚ニ以テ至寛量寛博又文章ニ有リ

○金　利秋　西ニ屬して白虎ニ為ハ白　相傳の官治節ニ出ヲ
人其氣ヲ得て生ルハ西上闊下殺至尚義又重兵權

○水　貞冬　北ニ屬して玄武ニ為ハ黒　作治の官伎巧ニ出ヲ
人其氣ヲ得て生ルハ眉濃門ヲ以テ至大寛ニ為又聰巧ニ有リ

五臟

肝
肝は臟は脉を所出風水
肝は竅を目に開くなり
目は肝に屬目和黑白を知る也
眉は肝に屬木氣を稟る也
春仁に屬

心
心腸は脉所出君なり
心竅を舌に開くなり
舌は心に屬は舌
髮は心に屬は火氣を稟る也
夏禮に

脾
脾は胃は脉は濕去に所出
脾は竅口を開くなり
口は脾に屬は口和則穀味を知る也
中央信に

肺
肺は大腸は脉燥令に出る所
肺竅を鼻に開くなり
鼻は肺に屬鼻和則香臭を知る也
毛は肺に屬金氣を稟る也
秋義に

腎
腎は膀胱は脉寒水出る所
腎は竅耳を開くなり
耳は腎に屬耳和則玄音を知る也
鬚は腎に屬は水氣を稟る也
冬智に

四 習法式

一 無法は書に上根は千字を習ひ中根は七百字を学ひ
下は百字を学ふと云へり強によく一字をなるべしよりは
忌に千字を習ふ事しと云へり

一 東坡の曰真(シン)は立つごとく行はゆくがごとく草はそしらはかが
ごとし其草行は三体真を以て宵とし行を以て
肉とし草を以て皮とすと云へり

一 硯はやはらか雲はよくしまり硯かたは雲力を入て摺る
事し雲面打は仕様は紙に錦に包打事し雲は新さ

蘭を以て包而打しをるがよし若楊をもらい石鍋の湯にて洗ひ
膠を塗て干て用ゆ事し

一 筆は打候ハ麦ハ笠(サヤ)をさす冬ハさやを花事し常ハ垢湯(ヨそ)
洗ひて而打ち事し毛和ゆや出ハ除してよし

一 紙こるくして墨不付ハ白水を入墨を搦て書事し又
多紙令箱塗物などのよふ書付墨付ぶんハ解其ハ
粉を墨ハ入て書事し

一 石又ハ物を書付て後の世まで立ぬ法あり龜の
屎(イビリ)を墨ハいりて書事しと古草ハ草木志ハ見へたり

龜いぞりハ物を乗りハまる物なりハ木石を乗(ヤハ)こそ此
ほうの理なり龜の屎ハ多く言ふくさくもの也龜をなるる
折皮のよふなる鏡を見まれハ已ら妻ゝと思ひ精汁を出
このなり又なりこれ自然汁太刀子ハ汁を用ると云説ハあり
空海石ハかりしし事あり石ハ立書て行求迄ハ清和ハ
書法なれハ洗や木ハ書事たやまなる事しとて後の世ハ
筆道を残し無れをるを入木道といふなり慶海先生中子
古人云書を陪まる云ハまず其大意を得事し昔より今に
知るまで従容にて玩味して二筆を用ゆの法何より起り

何にか終事を看体執法度一ニ小其處小處して諸佛
そして是を見るかことくせよ此新事既小久しく筆をくぐれ
雇し筆をかきの時まゝ則其々似ん事を求ることなり
且汎瀾容與そして且ゞ合ひ且ゞなり神遊ひ意合を
雇し此是を習ひ大かいを壞て如ち小潤色を以て則是修神の
法なり字を脩す事人の脇を結ぶことし一月ち十月小至て
先脛廓をそなへ後形体を備ふ日支百竅一時ことくく具り
今日一日を倣ひ明日一日を備ふるに志ゆ若筆を悲ニ画ニ
是を求ハ去る事所遠し此文字膽肝を画く事を詞れ

意をしくハ人いまゝ悟ることのあらん

一 古人書は墨を用ゐ事其墨ならん事を欲るに遊ざるの際
允けつりすく皆なを雇し後世ニ光を發せん事を欲し其
香らん事を欲し其皆らん事を欲を故に造作百瑞頻合玉
ニ
俳し其味小趁て其本を忘るなり

一 墨甚く凍ゆれハ膠の氣をて字は光を發せず無新ゆれハ
膠は氣なりくて筆纏滯する事多し唯三五十年の後
取合せて用ゐ雇し

一 世にとてそやを唐横とへるもの實は唐横なるやと同もの運
に

芳園親王の書様に其職の唐様也今の人是唐様といへるは
懷素又は藤元章等の筆の法にはなれて相倒にして其法を
失ひ以愛法を学びたる実の唐様は常し昔より二王の筆法
第一とせるは其法の中に其故に二王と答しと云

一 或人筆法論ける詞に此國の書を而に事芳園親王の書を
而せるより喪へそりといへり世に知りて志す事と云事あり又知りて
知らると云事あり此詞知りて知詞なるべし筆法是文風聲
筆者の遠きて芳園の筆而と唐様といふ所に筆は知りて此と
なるべし蓋恵の碑而と云事はむしは今にちがへり王の唐様なり

一 此國の筆法といへるは壬辰の乱後よりこと聞て此國に
伝る漢人の書しへしを加藤の甲斐伝へそるなりされは漢
人是書を而にを見るに筆の意甚く遠へり

一 宋の人な邦の三日人の書を觀て曰こゝ二王の跡にて中
古の能書なる表は文よく及事なく而しと今周是是を思ふ
此國の書は文いかしへに及ぶものとをし

一 階書五代乃間階書を以隷書といふ隷に秦隷漢隷の對
あり漢隷は今の階書これ也秦隷は程邈せ并子昂の
書所に云王頃仲そどみて階書を作る亦是階の始なりといふ

然ハ此人ハ中絶セシヲ王次仲古法ヲ得テ略略セシカ
又遠ニ後漢ニ至リテ蔡邕点画ヲ楷正シテ永字ハ八法ヲ
作テ隷ニシテ隷ハ書法ヲ以附ニ定ムモノニシテ程邈ノ隷書
全ク殺ル隷ハ秦ニ始ニ人ニも漢ニ立テ蔡邕ニ始ル故ニ漢隷
云也楷書ニ号ハ筆法楷正シテ秦漢ヲ以テ隷ハ古今の
別ヲ正シテ武法ヲ以邈ノ隷の真ニ故ニ楷書ニ云亦真ニ以
正書ニ云なり

一 墨妙纂曰分ヲ作ルハ秦ハ王次仲なり古今法書苑ニ云
小篆散シテ八分生ヲ八分散シテ隷書出ニ史分ハ字粗
勢ヲ八分ニ至リ也ニ八分ニ云

一 行書ハ墨妙纂ニ云行書ヲ作ルハ後漢ハ潁川劉德昇
なり略正書ニ依テ勢テ簡易ニ從テ書ヲ書流行ヲ
書ヲ行書ニ云

一 章竹ハ書訣ニ云漢ハ黄令史游ガ作ル所なり 書ニ云ニ云ヲ
文字ヲ書ハ如シテ子ヲ以テ書ル文字ヲ書くハ如シ
ひ云ニ文字ヲ作ルニ此法ヲ用ヒ廣シ故ニ向の人ニ
以合シ書なり

一 張ハ字ヲ如ク法ハ書損シテ時ハ書ニ也湯ニ渡シ書なりて

濁ある字をする事なし此ふん志かはりて書をすひきる也
但ふん志あれ違はけしくよく指てかりて接する事なし
一　字を書換しくるを接穂待書換ひきる時は大根をつきて
おろしまそおろし此おろし大根そて字たとをする事なし
悪くおつる所り其後また此ふんを引事なし